

関東甲信越支部

# 1970年代から現在と未来を考える 2

## C. アレグザンダー再考：『生活の創造』に向けたノンモダンな方法

川島範久



昨年のJIA セミナーでのプロジェクト「1970年代から現在と未来を考える」の続編として今年度はC.アレグザンダーを取り上げ、2019年10月22日に盈進学園東野高校を見学し、その後12月7日に座談会が行われた。見学会では、方法論を体現した建物群や外構とともに、風化や使用者による改変など時間の堆積が確認できた。布野修司、難波和彦、辻琢磨、中村健太郎、青井哲人(モデレーター)各氏による座談会では、理論的蓄積のある難波氏の発言に対して中村氏のマッチポンプやシステムエラーという指摘や辻氏の実践紹介はすれ違う場面もあったが、青井氏の提示するキーワードが辛うじて両者を繋ぎとめて、理論の解題とは違う、より自由な解釈の可能性も垣間見られて興味深かった。川島範久氏に、感想をもとに論考を執筆いただいた。プロジェクトのレポートとして、またアレグザンダーを現在に引き寄せる糸口としてお読みいただければと思う。(JIA建築セミナー実行委員 馬場兼伸)

本稿では、パタン・ランゲージで知られるクリストファー・アレグザンダーの日本における実作「盈進学園東野高等学校」(1985竣工)の今回の見学会 [Fig.1]、その後の座談会での議論、およびアレグザンダーの著作や関連雑誌記事、元理事長・細井久栄のブログ等の文献調査をもとに、盈進学園の建築とそのプロセスの分析を通して、現代にアレグザンダーを見直す意味を考える。

この建築プロセスの各段階においては、「ユーザー参加」「パタン」「センタリング」といった3つの原理が貫かれた。

### ■ユーザー参加

この「ユーザー参加」として、まず全教員と一部の学生に個別



Fig1. カフェテリアから広場を望む

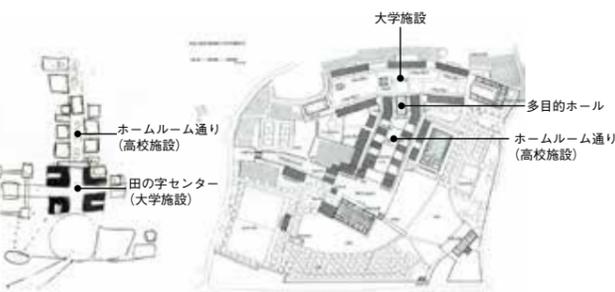


Fig2. 配置計画 (左: 敷地を考慮しない状態でのパタン・ランゲージの図式化、右: 最終配置計画図) 出典: Christopher Alexander, *The Battle for the Life and Beauty of the Earth: A Struggle Between Two World-Systems (Center for Environmental Structure)*, Oxford University Press, 2012

\* 図中 日本語テキストは筆者による

にインタビューが行われた。無意識に隠された「本音」を確かめるため、くつろいだ雰囲気の中で、時には目を閉じてもらって、純粋な理想や夢を語ってもらったそうだ。キャンパス全体に求めるものから個別施設の要望まで、大勢が共有するような最大公約数を求めることはせず、個人的なアイデアであっても、それが目指すキャンパスにふさわしい場合には積極的に取り上げた。

### ■プロジェクト・ランゲージ

これをもとにこのプロジェクトのためのパタン・ランゲージ「プロジェクト・ランゲージ」が創り上げられた。全体ゾーニングから内装の詳細まで、8章からなる1冊の本として完成された。ある教員は「これはそのまま、教職員の思いで学校を表現している『詩』ではないか。」と述べたそうだ。例えば「第一の門より内境内に向けて玄関道がある。玄関道の両側に壁か樹木が並び、非常に静かである」(2章3節)や、「湖の水辺へ続く芝生は、くつろがせるし、心地よく打ち解けた感じである。ここは学生が草の上に寝ころがり討論できる場所である」(4章3節)といった節をみてもわかるように、まるで学園がすでにそこにあるかのように描かれている。『パタン・ランゲージ』(1977)で示されたパタンの形式は「ある状況が与えられ、そこに生じるフォースが特定され、そのフォースの求める形が導き出される」といった形式のもので、美しい建築やまちをつくってきた文化や伝統の特徴を「パタン」として形式化し、単語のように組み合わせで新しいまちや建築づくりの共有言語としようというアイデアだった。しかし、この盈進学園において「パタン」と呼ばれているものはそれとは異なり、自己の深い感情の中に現れる形(構造)そのものを描写することが求められている。

### ■配置計画

敷地の周辺は一面の茶畑で、起伏に富んだ土地だった。先のプロジェクト・ランゲージをもとに現実の敷地を想定せずに考えられた配置計画案と最終配置計画案の違い [Fig.2] は、この土地が持つ構造を保存しようとする「構造保存変換」の概念の適応であり、それに伴い変更が迫られる空間構造を、それぞれの中心が他の中心を補い強化するようにすべきといった「センタリングの原理」によって生み出されたといえる。

### ■センタリング・プロセス

この原理は「15の幾何学的特性」を基礎に置く。パタン・ランゲージだけだと散漫で加算的な建築を生み出す傾向にあり、究極の目的である「質」が生み出せない。当初は「無名の質」として呼ばれていたが、『ザ・ネイチャー・オブ・オーダー』(2003)で、それはあらゆるものに存在する「生命構造=センターが構造化されたもの・全体性」であると定義された。そのような特性は、自然界や人間が長い時間かけて創り上げてきた美しい人工物には必ず存在するものなのだ、と。

この原理に基づく象徴的な計画の変更が2つある。ひとつは、はじめの配置計画案において、学校の最も大切な中心としての主に大学施設で構成される「田の字センター」と、高校の教室群によって構成される「ホームルーム通り」の順番を変え、大学施設が高みの丘の上に移され、「ホームルーム通り」をたどっていくと到達できる最終地点となるように調整されたことだ。もうひとつ

(左) Fig3.多目的ホール内観  
(中) Fig4.体育館内観  
(右) Fig5.大講堂内観



は、その変更で生まれた大学と高校の結び目の調和の弱さを解決するために「多目的ホール」が新たに追加されたことである。これにより、「幾重もの層を通り抜けて到達できる場所……それ自体にも更に重なり合いがあり、それ以上の静けさがそこにある」(2章7節)「一段高いところで、最も平和な場所になっている。静かに瞑想したくなる場所である」(2章11節)と表現されていたことが見事に実現されており、最も成功した美しい建物になった。今回の見学者の多くもこの建物を特に高く評価していたように思う [Fig.3]。

この配置計画の検討プロセスは、現地で旗のついた竹竿を建てながら確認し、それを模型に反映する作業が繰り返し行われた。このようなリアルなフィードバックは、配置計画段階に留まらず、最後の施工段階まで繰り返された。理想は直営方式だったが、厳しい施工期間ゆえに断念した。しかし、ゼネコンの傘下で、設計者が現場で、発注者と相談しながら、日常的にデザイン変更を検討するという体制が維持された。それによりさまざまな衝突が発生したのはいま言うまでもない。

パタン・ランゲージの形式がコンピュータープログラムに応用されたことが近年再び注目されていることも要因と思うが、『パタン・ランゲージ』を用いれば、誰でもユーザー参加で簡単に建築をデザインし、つくることができる、と捉えている人が少なくないのではないだろうか。しかし、それは明らかに誤解だ。アレグザンダーの理想を実現するには、発注者も設計者も施工者も、膨大な努力が必要なのだ。そして、特に注目すべきは「センタリングの原理」によるプロセスだ。これは「個人の創造性」によるバックアップがなければ実現が難しく、建築家が日々悪戦苦闘しているデザインプロセスそのものではないか、と多くの読者は感じたのではないだろうか。

さて、ここまで紹介してきた「プランニング」については大いに共感する一方、盈進学園における「材料・構法」や「スタイル・装飾」については首をかしげる人が今回の見学会で多く見受けられた。

### ■材料・構法

当時は全国の学校建築がRC校舎と鉄骨の体育館に変わっていった時期であり、大規模木造の体育館 [Fig.4] を持つ木造低層を主体にした学校キャンパスは極めて異例なものとして多くの人々の関心を集めたのであるが、宮大工を起用しているにもかかわらず、継手・仕口の組手がほとんど排され、金物による接合が主体となっていることに関する批判が当時もあったようだ。しかし、当時は実現が難しかった大規模木造を建築センターの評価を得ることで建築許可を得て実現する腕力には驚かされるし、それによって実現された木造大架構は力強くユニークだし、その他にも白木に包まれた教室や教員室の内装、小割の木製窓サッシや木製建具、そして、漆喰や瓦を積極的に活用している点など、木造復権が叫ばれ、自然素材や伝統技術の再評価が行われている現在から見ると、材料・構法の観点からは、むしろ共感することの方が多いようにも思える。

### ■スタイル・装飾

つまり本当の論点は「スタイル・装飾」なのだろう。大時代風

の歴史的雰囲気、ホームルーム通りは倉敷に似ている、蔵のコピーだ、大講堂の形がバシリカ様式の踏襲だ、広場・池・食堂のつながりに特定の庭園様式が見られる、といった論評が当時もあったようだ [Fig.5]。これが「伝統様式の意図的採用」と捉えられ、当時の伝統志向からテクノロジー志向までの幅をもつポストモダニズムという潮流の中で、一方の極に位置づけられたのである。しかし、アレグザンダーは「歴史的な建物に似せようとしてつくられたのではない」と言う。歴史的な建物は常に人の感情を大切にすることでつくられており、だからこそ同じような形と特徴を持ったと考えているのだ。

どうやら、このスタイル・装飾については、「ユーザー参加」によるところも大きいようだ。細井久栄のブログ『小さな美しい村』(2018)によれば、例えば「外国人の建築家が中途半端に他国の伝統を真似しようとした」と揶揄された赤い小屋根を持つ玄関道の板塀は、実はある教員によるスケッチに基づいたもので、教室棟についても教員から希望するイメージとして「擬洋風の木造校舎を」とストレートに伝えられたそうなのだ。「西洋の原形を日本人の解釈したもの、もう一度西欧的解釈をするという複雑な操作をすることになり、無国籍なものになった」といった松葉一清の解釈(『近代』との闘争『新建築』1985年6月号)には納得できてしまう。いずれにしても、これらの特徴によって、確かに「人懐っこい表情のキャンパス」がもたらされていると感じた。

### ■『生活の創造』に向けて

アレグザンダーは「全ての人間は空間をつくる能力を持っている」と考えている。そして、その能力を最大限に活かしてつくられるべきは、人びとの深い感情に関わるような「生きた構造」を持った建築・都市であり、そのような環境を通した『生活の創造』こそが重要だと主張する。そのためにこそ、ユーザー参加、パタン、センタリングといった方法は必要なのだ。これらは、人のリアルなものの根源である「自己」の構造によって世界のリアルな構造の価値を直接測る方法である。つまりは、建築主・建築家・施工者といった「計画者」を世界の外側のものとし、主観的な要素を排除して客観的にデザインしようとするような方法ではなく、プロジェクトに関わる全ての人の、個人的な興味関心や、生まれ落ちた地域の文化や、その活動に伴う社会的な関係を含めて、全てをひっくるめた世界の内側にある諸要素同士の関係性の中で形成される判断基準に基づき、そこで求められる形(形状)だけでなく、プランニング、材料・構法、そして装飾も)を徹底的に追求する「ノンモダン」な方法と捉えることができるのではないだろうか。プレモダンに見える構法や、ポストモダンに見える表現によって、誤解され続けてきたアレグザンダーの方法をそのように見直すことで、これからの建築を考えるヒントが見えてくるかもしれない。

### 川島範久(かわしまのりひさ)

建築家・川島範久建築設計事務所主宰・東京工業大学助教/1982年生まれ。2005年東京大学卒業。2007年同大学院修士課程修了後、日建設計。2012年カリフォルニア大学パークレー校客員研究員。2016年東京大学大学院博士課程修了・博士(工学)取得。日本建築学会賞(作品)、サステナブル住宅賞国土交通大臣賞、前田工学賞ほか。